

11	学校名 上尾市立東中学校	27～30
----	--------------	-------

## 平成30年度研究開発自己評価書

### I 研究開発の内容

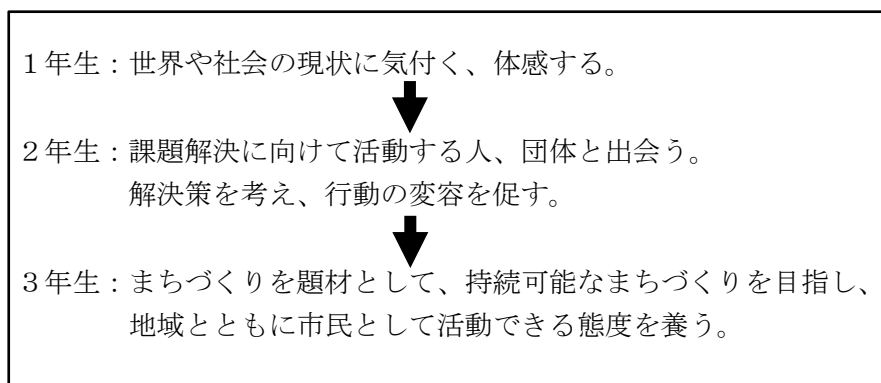
#### 1 教育課程

##### (1) 編成した教育課程の特徴

- ・「総合的な学習の時間」を新教科「グローバルシティズンシップ科」に充て全学年で実施。
- ・1年生は年間50時間、2・3年生は年間70時間実施。

##### (2) 教育課程の内容は適切であったか

- ・3年間を見通したカリキュラムの作成  
社会課題を「自分ごと」として捉え、大きな枠組みから足元にある社会につなげられるようカリキュラムを作成した。



- ・「目指す生徒像」と「資質・能力」の関連付け

本校では、5つの目指す生徒像を設定し、生徒像をもとに8つの「資質・能力」（社会参画・多文化共生・課題発見設定・批判的思考・協働・資料収集活用・課題解決・表現発信）を設けた。これらをグローバルシティズンシップ科を通して身に付けたい資質・能力として捉えている。それぞれの単元、授業の中でこれらの資質・能力を身に付けられるよう単元、授業の工夫をした。

- ・幅広い学習内容の適用

年度当初にグローバルシティズンシップ科の中で扱う題材について共通理解を図り、1つの題材に焦点を当てるのではなく、幅広い題材を扱えるよう教材作成を行った。そのため、身近な課題である「学校づくり」から地球規模課題まで幅広い分野の課題を題材として扱い、生徒の興味・関心の幅を広げることができた。

- ・SDGsを柱とした学習

昨年度からSDGs（持続可能な開発目標）を学習の柱に置き、SDGsと自分たちの生活が密接に関わ

#### 目指す生徒像

- 1 自らの考えや根拠のある意見をもって社会に「参画」できる生徒
- 2 多様な文化、習慣、考え方を尊重し、共に生きることができる生徒
- 3 自ら課題を見付け、物事を多面的に考えられる生徒
- 4 クリティカルな思考を身に付け、自ら進んで調査し、発信することのできる生徒
- 5 一人の市民として、より良い社会づくりに協働して参画できる生徒

社会参画

多文化共生

課題発見・設定

批判的思考

協働

資料収集・活用

課題解決

表現・発信

り合い、身近なものとして捉えられるよう学習内容に取り入れた。SDGsを知るための学習に留まらず、生徒一人一人がSDGsを達成するための担い手として意識できるよう学習内容を工夫した。

・「自分」と結び付ける内容づくり

地球規模の課題（難民問題、環境問題など）という大きなテーマであっても、必ず「自分」とのつながりを考え、見付け、課題と自分を関連付けられるよう教材を作成したり、発問の工夫を行ったりした。

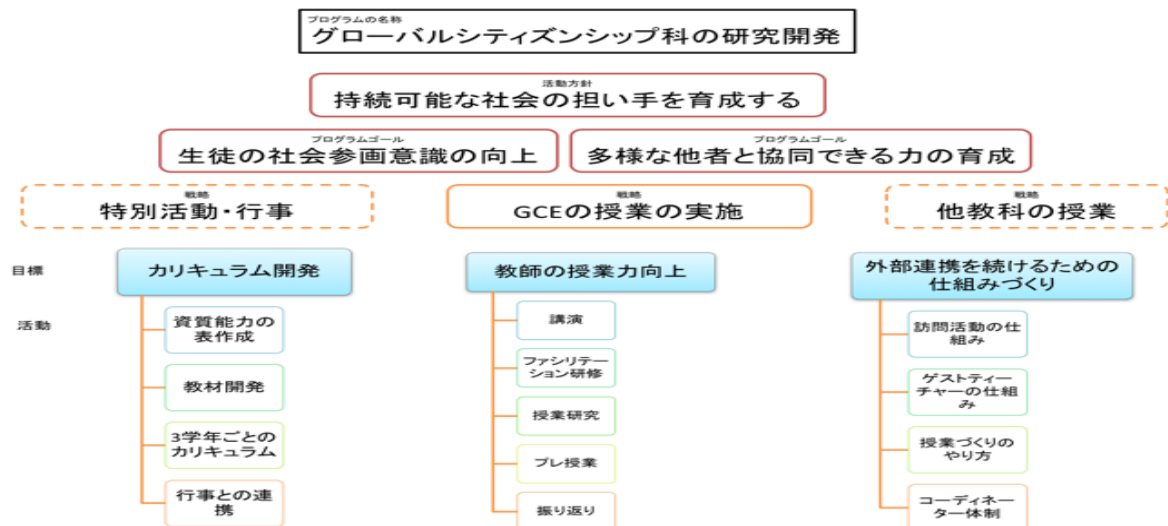
・学校行事と併せた内容の実施

修学旅行・職場体験学習・校外学習とグローバルシティズンシップ科を連携させて単元を作成した。授業と関連付けることでの課題もあったが、事前学習、事後学習まで含めてプログラムを作成することができた。

・ロジックモデルを用いた、プログラム評価の実施

本校の作成した教育課程そのものが、中学校過程におけるシティズンシップ教育の在り方を考え、生徒に資質・能力を身に付けさせるために適切かどうかを測るためのモデルとして、ロジックモデルを作成した。

プログラムの構造



(3) 授業時間等についての工夫

- ・毎週、金曜の午後を本科に設定した。
- ・2時間連続の時間を確保し、内容の充実を図ることができた。

2 指導方法・教材等

(1) 実施した指導方法等の特徴

・参加型学習

教師を「ファシリテーター」とした参加型学習の形態を用いて授業を進めた。教員研修の一貫としてファシリテーション研修を実施し、生徒と共に考える姿勢や効果的な発問の仕方について工夫を重ねた。「参加型学習」を単に「参加」で終わる授業ではなく、授業の先には「社会参画意識の向上」があることを共通理解した上で学習を進めた。

・授業の手法

参加型学習を実施する際に、多様な手法を用いて授業を実践した。これらの手法は本科のみならず、各教科の中で用いられることも多く、生徒の主体的・対話的な学びを促進することができた。

その他必要に応じて、調べ学習や話し合いのまとめに「思考ツール」を用いた。思考ツールを活用することで、考えを深めたり、情報を整理したりすることができた。

- ・「世界」と「自分」をつなげる指導の工夫

遠く離れた国の話題であっても、自らが体験したことのない話題であっても「自分」と「課題」がどう関わっているのかを見出し、一つ一つの課題を「自分ごと」として捉えられる指導について研究した。

- ・教材

開発教育・国際理解教育の中で使用されている教材を基礎として、ワークショップ形式で授業を進めた。参加者である生徒が主体となり新たな課題や世界の現状に「気づき」、解決の方策について「考え」、自分との関わりを見出し、解決のために何ができるか「行動する」プランまで導いた。

教材の中に「気付く（知る）」→「考える」→「行動する」の一連の流れをつくった。

- ・課題設定時の工夫

2年生では、クラス討議を経て、学習テーマを決定する。3年生では、まちな現状を知った上で、各自で課題設定を行なった上で、学習テーマを決めていく。自らが選んだテーマに沿って学習を進められるような学習の流れを作成し、生徒の自己決定が反映できるようにした。

- ・掲示物の利用

教室にGCEコーナーを作り、新聞記事や資料などを掲示したり、記事や資料の内容と関連するSDGsの17のゴールを結び付けたりするなど、視覚的に分かりやすくする工夫を行った。

## (2) 指導方法等は適切であったか

- ・担当教師を「ファシリテーター」とした参加型学習では学習者が主体的に考え、行動できるようなグループワークを毎時間取り入れることで、生徒の課題意識を高めることができた。
- ・学習の流れを「気付く（知る）」→「考える」→「行動する」のプロセスに統一し、学習内容が変わっても、同様に学習を進めることで、生徒が見通しをもって学習に取り組むことができた。
- ・教師が授業の中で、ファシリテーションスキルとして多様な手法を身に付けたことで、各教科においても授業形態の工夫が見られ、生徒主体の授業を展開することができるようになった。
- ・どのような課題に対しても「自分」との関わりについて触れたことから、生徒は、地球規模の課題に対しても「自分」とのつながりを見出し、自らの課題として捉えて学習を進めることができた。
- ・SDGsを活用した掲示物を工夫することで、校内でグローバルシティズンシップ科の授業内容やSDGsを常に意識することができ、学習への意欲が高まった。

## II 実施の効果

### 1 児童・生徒への効果

- ・思考力・判断力・表現力等、学ぶ意欲などを含めた学力向上

グローバルシティズンシップ科で扱う課題を話し合うためには教科学習の知識も必要であると生徒自身が認識し始めている。教師側が指示を出さなくとも、社会科の資料集や地図帳を使いながら、本科の授業に参加する生徒が多く見られ、教科との連携が自然な形で進んでいる。

また常に物事を複眼的にとらえ、多様な考え方をもち、受け入れる生徒が増えている。話し合い活動や参加型学習の手法を体験することから、社会参画意識の向上へとつながり、「学んだことが社会の中で生かされる」という意識をもっている生徒が多く見られるようになり、学ぶ意欲の向上が見られた。

・4カ国比較から見える本校生徒の社会参画意識

毎年実施している「社会参画意識に関するアンケート調査」と平成21年実施の日本・韓国・中国・アメリカの4カ国実施のアンケート調査を比較すると本校は「自分の参加により社会を少しでも変えることができる」と思う生徒の割合が日本の平均よりも高く、「とてもそう思う」と「そう思う」を合わせると60%を超えている。本校での実践を通して、社会との関わりを実感し、自分のできることや関わられることを見出した結果、「自らが参加することで社会を変えることができる」と答える生徒が多くなったと考えられる。

また、「現状を変えようとするよりも、そのまま受け入れる方が良いと思う」という質問に対して、本校は「とてもそう思う」「そう思う」と答える生徒の割合は3割程度で日本の平均のおよそ半数であった。つまり、本校の生徒は、「現状を変えようとするならば、そのまま受け入れるのではなく、反対意見や何かしらの代替案を示すことが大切である」と考えていることがうかがえる。自らが「おかしい」と思ったことに対して、声を上げることができる市民としての素地を育むことができた。

グローバルシティズンシップ科では、参加型学習の形態で生徒主体の授業実践を重ねてきたことから、自らの考え、意見をもってより良い社会づくりに向けて参画しようとする「社会参画」の質能力を育むことができたと言える。

「自分の参加により社会を少しでも変えることができる」

(%)

	韓国	中国	アメリカ	日本	上尾東(H30)	上尾東(H29)	上尾東(H28)	上尾東(H27)
とてもそう思う	11.7	17.4	14.9	10.2	<b>24.5</b>	21.8	20.9	13.7
そう思う	54.8	40.9	39.3	27.1	<b>44.3</b>	45.0	43.3	48
あまりそう思わない	26.9	29.4	19.5	40.9	<b>24.2</b>	28.0	27.9	27.2
全くそう思わない	5.1	9.9	9.5	18.6	<b>5.7</b>	5.1	8.1	7.3

「現状を変えようとするよりも、そのまま受け入れる方が良いと思う」

(%)

	韓国	中国	アメリカ	日本	上尾東(H30)	上尾東(H29)	上尾東(H28)	上尾東(H27)
とてもそう思う	10.6	14.0	25.4	32.1	<b>9.6</b>	7.6	10.3	6.5
そう思う	38.9	25.6	32.4	34.8	<b>22.8</b>	26.8	35.4	35
あまりそう思わない	39.5	33.9	17.1	25.0	<b>50.5</b>	51.3	43.6	45.9
全くそう思わない	10.8	25.1	10.6	7.1	<b>15.8</b>	14.1	10.6	8.0

平成21年2月(財)日本青少年研究所

「中学生高校生の生活と意識-日本・アメリカ・中国・韓国の比較-」より

・アンケート調査から見える本校の生徒の変容

ア 調査の目的

本年度、4年目となる「グローバルシティズンシップ科」の取組における、生徒の意識の変化についてアンケート調査を用いて測定することで、授業の効果を検討することを目的とする。

イ 調査の対象とする生徒(上尾市立東中学校在籍生徒)

平成30年度 660名(1年生196名、2年生231名、3年生233名)

平成29年度 687名(1年生233名、2年生228名、3年生226名)

平成28年度 660名(1年生229名、2年生217名、3年生214名)

ウ 調査事項

① グローバルシティズンシップ意識尺度

グローバルシティズンシップ意識を測定するために23項目のアンケート調査を実施した。いずれも、「1：まったく当てはまらない」から「6：とてもよくあてはまる」までの6件法であった。本校では、グローバルシティズンシップ意識を「活動」、「関心」、「共生」の3つの概念から構成されると定義する。

「活動」：「学校を良くしたい」「地域のために活動したい」という主体的な行動につながる項目  
 「関心」：「世界のことを知りたい」「興味をもって調べたい」という興味・関心に関わる項目  
 「共生」：「異なる他者の考えを大切にしたい」「ふれあいたい」という共生に関わる項目

表1 グローバルシティズンシップ意識についての年度ごとの比較

項目番号	項目内容	2016年		2017年		2018年		年度の比較 (統計的に有意な場合のみ記載)
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
Q1	世界が抱える課題を解決するためには、自分にもできることがある	4.32	1.07	4.41	1.12	4.62	1.16	2018>2017,2016
Q2	人の役に立つ行動を取りたいと思う	5.02	0.96	4.97	1.00	5.04	1.03	
Q3	自分のまわりが豊かになれば、他の人や国の様子は気にならない	2.64	1.17	2.53	1.18	2.43	1.24	2016>2018
Q4	係活動や委員会活動が積極的に活動すると学校は良くなると思う	4.97	1.04	4.91	1.10	4.96	1.12	
Q5	宗教の違いを理解したいと思う	4.07	1.31	4.05	1.39	4.16	1.39	
Q6	世界の課題を解決するのは国のリーダーだけで充分だ	2.36	1.10	2.33	1.14	2.18	1.12	2016,2017>2018
Q7	自分が変われば、東中学校も変わると思う	3.31	1.25	3.37	1.31	3.43	1.33	
Q8	地球的規模の課題について説明することができる	2.81	1.23	2.82	1.18	3.23	1.33	2018>2017,2016
Q9	自分と異なる習慣や文化を持っている人と生活を一緒にすることは楽しい	4.00	1.16	4.07	1.26	4.19	1.27	2018>2016
Q10	選挙以外に政治に参加することができると思う	3.52	1.18	3.52	1.17	3.52	1.31	
Q11	課題を解決するときは、1人よりもグループで一緒に解決したい	4.87	1.14	4.94	1.24	4.88	1.24	
Q12	人間が便利な生活を送るためには動植物のくらしは犠牲になっても仕方ないと思う	2.47	1.32	2.39	1.37	2.37	1.39	
Q13	自分の町を良くするために活動したい	4.41	1.09	4.28	1.16	4.39	1.20	
Q14	東中学校がより良い学校になるために活動をしたい	4.61	1.08	4.59	1.08	4.69	1.11	
Q15	言葉が通じないと友達になることは難しい	3.21	1.36	3.18	1.34	2.98	1.38	2017,2016>2018
Q16	自分の住んでいる町の課題を詳しく説明できる	2.78	1.19	2.85	1.23	2.86	1.29	
Q17	世界のニュース(話題)についての情報に注目している	3.81	1.24	3.85	1.24	3.84	1.33	
Q18	お金があれば、何でも手に入れることができる	2.78	1.41	2.86	1.51	2.68	1.49	
Q19	世界の課題や変化は自分の生活とつながっていると思う	4.26	1.17	4.32	1.14	4.33	1.27	
Q20	ゴミ拾いなどの地域の活動に参加している	3.84	1.41	3.72	1.41	3.63	1.52	2016>2018
Q21	今の自分は社会と関わりを持って生活をしていると思う	3.78	1.16	3.88	1.16	3.98	1.26	2018>2016
Q22	食事の習慣が違う人と一緒に食事をするのは大変だ	3.38	1.26	3.25	1.30	3.06	1.37	2016,2017>2018
Q23	言葉が通じない人に話しかけられてもコミュニケーションを取ろうとは思わない	2.49	1.14	2.49	1.21	2.25	1.21	2016,2017>2018
	活動	4.42	0.75	4.40	0.76	4.45	0.79	
下位尺度	関心	3.63	0.78	3.67	0.76	3.76	0.84	2018>2016
	共生	4.24	0.79	4.28	0.84	4.44	0.86	2018>2017,2016

## ②社会参画意識

社会参画意識を測定にするために10項目のアンケート調査を実施した。本調査は、(財)日本青少年研究所が平成21年2月に実施した「中学生高校生の生活と意識—日本・アメリカ・中国・韓国の比較—」をもとに質問紙を作成した。いずれも、「1:まったくそう思わない」から「4:とてもそう思う」までの4件法であった。

表2 社会参画意識についての年度ごとの比較

項目番号	項目内容	2017年		2018年		年度の比較 (統計的に有意な場合のみ記載)
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
Q1	自分は価値のある人間であると思う。	2.58	0.80	2.68	0.84	2018>2017
Q2	自分は人並みの能力があると思う。	2.64	0.79	2.66	0.84	
Q3	私は将来に不安を感じている。	2.79	0.90	2.72	0.92	
Q4	勉強が大事だと思う。	3.50	0.69	3.57	0.64	2018>2017
Q5	自分の希望はいつか叶うと思う。	2.91	0.88	2.93	0.87	
Q6	自分はダメな人間だと思ふことがある。	2.89	0.85	2.88	0.83	
Q7	社会のために役立つ生き方をしたい。	3.28	0.77	3.37	0.73	2018>2017
Q8	自分の参加により、社会を少しでも変えられることがあると思う。	2.81	0.84	2.88	0.85	
Q9	現状を変えようとするよりも、そのまま受け入れるほうがよいと思う。	2.29	0.83	2.26	0.84	
Q10	私は将来に対し、はっきりした目標をもっている。	2.75	1.00	2.88	0.97	2018>2017

## ③分析と課題

グローバルシティズンシップ意識、社会参画意識ともに2018年度の結果が今までの結果を上回る結果となった。グローバルシティズンシップ意識では本校で取り組んできたグローバルシティズンシップ科の取組によって、「関心」「共生」においては意識を高めることができた。しかし「活動」を示す項目では有効な変化を示すことができなかった。

社会参画意識の向上については、本科の中で多様な方々とともに学習を進めてきたこと(ゲストティーチャー、学校外の場所でのインタビュー活動など)から、将来に対して目標をもち、社会貢献への意識が高まったことが考えられる。

実際の学習の中で、学習のプロセスを「気付く(知る)」「考える」「行動する」の3ステップとして示してきたが、学校の学びを実際に地域や社会の中で「行動」につなげるまでに至らなかったことは多く見られた。3年生のまちづくりを題材とした単元では、より良いまちづくりに向けて提案書を作成したり、企画案を作ったりしてきたが実際に目に見える形で変化を遂げるまでに至らなかったり、生徒自身が提案内容を実行する(特産品の販売やボランティア活動など)までには至っていない。

そのことから、本研究において課題に対して「関わる」「興味をもつ」意識を育むことや「多文化共生」を実現するための意識への向上は見られたが、「行動」する意識を育むことへの困難さが明らかになった。

また、本校で設定した8つの資質・能力(社会参画・多文化共生・課題発見設定・批判的思考・協働・資料収集活用・課題解決・表現発信)と本アンケートの結果を関連付けると、「共生」を示す項目(「言葉が通じない人に話しかけられてもコミュニケーションと取ろうとは思わない」や「言葉が通じない

と友達になることは難しい」) の回答から「多文化共生」の向上が見られた。

社会参画意識を問うアンケート項目では、「社会のためになる生き方をしたい」の回答に有意な差が表れ「社会参画」の向上が見られた。

その他の項目に対しては、本アンケート項目から測ることはできなかった。

## 2 教師への効果

### ・教師へのアンケートから

本年度10月に行った校内でのアンケート結果から、「グローバルシティズンシップ科を通して自身の変容」を聞いたところ、8割の教師が「変容があった」と回答している。変容したところとして以下のような意見があった。本科の実践を通して、教師自身が変容したことがうかがえる。

- ・生徒と対話をしながら授業を進めるようになった。
- ・社会の出来事について「自分には関係ない」と思わなくなった。
- ・「問い」の立て方に着目するようになった。
- ・ニュースや新聞記事の中からSDGsに関連したものを読んだり、調べたりするようになった。

### ・指導方法等の改善

ファシリテーションの手法を用いて授業を展開することで、1つの課題に対して、多様な考え方があることに、教師自身が気づき、生徒の意見を引き出すことができるようになった。日本のみならず、海外での取組に目を向ける教師や、新聞を数社読み比べ、資料を提示できるよう教材研究を工夫している。生徒の中にある「多様性」に着目し、1人でも多くの生徒の意見を引き出し、つなげようとしている様子が多く見られる。

### ・教育実践への意欲・自信・満足感／教師間の連携・協力

生徒同様に、日頃からグローバルシティズンシップ科で扱っている項目について新聞記事を集めたり、ニュース等を通じて情報収集を心がけたりする教師が増えた。情報交換をし、教師同士が情報を共有し合い、授業に向かう姿勢が見られるようになった。

タブレットを用いたICT活用にも積極的に取り組む教師が増え、効果的な活用について自主的に研修を積む教師が見られるようになった。

### ・グローバルシティズンシップ科を軸とした資質・能力ベースの年間指導計画の作成

各教科で作成してある年間指導計画にグローバルシティズンシップ科で育成する資質・能力(社会参画・多文化共生・課題発見設定・批判的思考・協働・資料収集活用・課題解決・表現発信)が各教科のどの単元と関連しているのかを明記し、視覚可した。本科だけでなく、カリキュラム・マネジメントの観点から指導の系統性を確認することができた。

	4月	5月	6月	7月
<b>1年生</b>				
<b>GCE科</b>	GCE オリエンテーション			
<b>学習内容</b>	ワークショップ体験(100人村 ジェンダー 水 食糧問題 )			
<b>資質・能力</b>	多文化共生 課題発見 課題解決			
<b>国語</b>	書き留める・調べる・続けてみよう	わかりやすく説明しよう	情報の集め方を知ろう	言葉を集めよう
<b>学習内容</b>	集めた情報を整理し、記録する	観点を立てて書く		日常生活を題材とした構構えを書く
<b>資質・能力</b>	資料収集	表現・発信	資料収集	表現・発信
<b>理科</b>	植物の世界	植物の世界	植物の世界	身のまわりの物質
<b>学習内容</b>	花のつくり	根茎葉・光合成	植物のなかま	物質の区分
<b>資質・能力</b>	資料収集・課題解決	資料収集・課題解決	資料収集・課題解決	課題発見・設定・課題解決
<b>社会</b>	世界のすがた	世界の生活環境	古代文明	古代までの日本
<b>学習内容</b>	地球儀・世界地図	世界の気候帯と住居	四大文明のおこり	聖徳太子の政治
<b>資質・能力</b>	表現・発信	多文化共生	協働	課題発見・設定

- ・教員研修への意欲

ファシリテーターとして活躍する方を講師として招き研修を行った。学年を超えて本科の取組について振り返る時間を多く設けることや、目指す生徒像の共有を図り、授業改善へつなげる研修を組み立てている。研修も参加型学習の形態を用いて実施し、実践者である教師が主体となって研修を進めることで、教師の意欲に向上が見られた。

- ・新学習指導要領との関連付け

平成29年7月に告示されている新学習指導要領前文において「(略)一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」と明記された。前文の記述と本研究が示す内容との合致する部分が記されたことは本校の教師への大きな自信となった

- ・社会の変化へ先駆けた教育内容

4年間の研究期間の中で18歳成選挙の実施や18歳成人の制定など社会が大きな変化を遂げた。また国際社会においてはSDGsが採択され、世界で共有する目標となっている。本校での取組は社会の変化を先取りし、持続可能な社会を作るための学習として一つのモデルを全国へ示すことができた。

- ・グローバルシティズンシップ教育のモデル校

SDGsのゴール4に示されたターゲット7には、「2030年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバルシティズンシップ、文化の多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、すべての学習者が持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。」と記されている。ユネスコではグローバルシティズンシップ教育の推進を目指した教育モデルの必要性が求められ、本校の実践はアジア太平洋におけるユネスコ会議においてモデル校として取り上げられ実践発表の機会を得た。こうしたことから、教師一人一人がSDGs達成に向けて貢献していることを実感することができた。

### 3 保護者等への効果

- ・保護者への情報提供

学校だよりやホームページ等で、本科で扱った題材について情報提供をしていることから、保護者も本科の取組について理解を示している。生徒と保護者の会話の中でも本科で取り組んでいる題材が出てくることが増え、学校、生徒、保護者が一体となって授業づくりを進めることができた。本科を授業参観や公開授業の場で実施し、多くの保護者が参観できる機会を設け、生徒の様子や授業の内容を実際に見てもらおう場を増やしたことも効果的であった。

## Ⅲ 研究実施上の問題点と今後の課題

### 1 研究実施上の問題点

- ・「コーディネーター」としての教員の役割

本科での実践を重ねるために「コーディネーター」役の教師が必要であった。研究の方向性を示し、学校全体の学習の流れを把握して研修を実施したり、外部との関係連携を進めたりする役割を担う教師の存在が重要視される。今後、新学習指導要領で示されている「社会に開かれた教育課程」の実現に伴い、校内だけでなく地域、外部機関等の多様な方との連携をはかることが必要とさ



れる。その窓口となるコーディネーター役と教師がいることが望ましい。

- ・実践の継続性について

教職員の異動に伴い、毎年、新しい教員を迎えている。最終年度を迎えた今年度は、学年ごとに今まで本校の研究に関わってきた教員が中心となって、異動してきた教師と情報の共有を図りながらプログラムを作り、研究を進めることができた。来年度以降の継続の方法について整理が必要である。合わせて、本研究をとおして協力を得られた関係機関との連携の継続についても校内で継続できる体制を作る。

## 2 課題

- ・生徒に対する「評価」をめぐる課題

生徒が作成したワークシートや発表資料、振り返り用紙等を用いたポートフォリオ評価と、単元ごとに作成したループブックを用いて評価を行っている。通知表では記述で評価をしているが、記述をする際の評価の観点と授業と指導の一体化がまだ十分ではない。「行動の変容」や「非認知的スキル」をどのように測ることができるのか、といった指標作りへの議論も進めていく必要がある。

本研究においては、アンケート調査によって「多文化共生」「社会参画」を測る調査を実施することができたが、その他の項目においては、数値として示す調査を実施するに至らなかった。そのため、今後は校内で資質・能力を測定するための評価指標を作成し、引き続き検証を続ける。

- ・「プログラム評価」の実施

本科で実施しているそれぞれのプログラムと目指す生徒像の整合性を測るためにプログラム評価を検討する。各学年のプログラムを客観的に評価する指標を作成し、本研究の目指すところと本科での学びを教科する体制を整える必要がある。

- ・グローバルシティズンシップ科と各教科との連携

本科で得た学び、各教科で得た学びを互いに活用し合える仕組みをつくっていきたい。それぞれの固有の知識を各教科だけの「学び」にとどめるのではなく、カリキュラム・マネジメントの考え方を生かし、教科間で連携し合い知識が相互に転移し「教科」の枠を超えて活用できる工夫を考えていく。同時に、生徒も教師も本科で身に付けた資質・能力の各教科での活用を目指したい。